

比較文化入門 授業概要

担当教員名	授業のねらい
赤松 美和子	「比較文化入門」は、比較文化学部的一年生みなさんが、大学で比較文化を学ぶ基本的なスキルを身に付けるための授業です。 本授業では、高校の海外修学旅行の二日間分のプランを作成しながら、図書館の利用方法、資料の調べ方、発表レジュメの作成方法、パワーポイントでのプレゼンテーションの方法を学びます。 前半では、自分が選んだ地域（日本以外）について、文化や歴史に関するテーマを決め、テーマに沿って、図書館で資料を収集しながら、修学旅行プランを作成します。 後半では、受講者全員に一人ずつ、プレゼンテーションをしていただきます。報告者のプレゼンテーション後に、全員でディスカッションを行います。報告者以外にも全員に発言を求めます。 図書館の使い方、資料収集の方法、パワーポイント作成の技術、プレゼンテーションの方法、ディスカッションの練習を通して、様々な地域について、歴史的文化的視点から深くアプローチしながら、大学生として比較文化を学ぶための基礎力を養いましょう。
石川 照子	「アジア学入門」 比較文化という学問の基礎的内容について、アジアを材料として学習することを目的とした授業です。 アジアと一口に言っても、そこには多様な政治、経済、社会、文化、言語、人種、民族、宗教が存在します。そしてほとぼしる人々のエネルギーと将来の可能性が注目される一方、貧困と紛争等の問題はいまだ解決されていません。そんなアジアという地域をどうとらえたらよいのでしょうか。また、日本はアジアの中でどう生きてゆくべきなのでしょう。 授業では、まず「比較」とは何か、「文化」とは何かという事を学び、続いて教員が「アジア概説」と題して講義を行います。次に教材に沿って、多様な地域アジアの歴史と現状を学んでゆく中で、比較文化という学問の方法、対象というものを学んでゆきます。 使用する教材（『アエラムック アジア学のみかた。』出版元在庫切れの為、プリントして配布。その他のプリントもあります）は、政治・経済・宗教・民族・映画・教育・女性・衣・食等さまざまな分野、視点から多様な地域、アジアへと迫っていて、初学者にも分かりやすくアジアという地域が理解できるような内容となっています。 授業は以下のように進めていきます。①各回とも、報告者を中心に教材を輪読し、続いて内容に関するディスカッションを行う（その際、ディスカッサントをたてる）。②1つの回を2～3人ずつ位で分担し報告する。③報告者は、レジュメに担当部分の概要をまとめ、さらに論点を提出する。参考書も参照して十分な準備をして報告に臨む（報告の事前相談を行います）。④ディスカッサントは、次の回の者が担当して、論点等をコメントする。⑤随時映像や新聞記事も使用する。
上野 未央	日本に暮らす私たちが他の国や地域の文化を学ぶ意味はどこにあるのでしょうか。また、現代を生きる私たちが過去の出来事を学ぶことには、どのような意味があるのでしょうか。このような問題意識を出発点として、この授業では、中世ヨーロッパ史の入門書を読んでいきます。はっきりとした「答え」が出るような問題ではないかもしれませんが、授業を通して、受講生それぞれが「文化を学ぶということ」について自分なりの考えを持てるようになることが、この授業のねらいです。 テキストとする『自分のなかに歴史をよむ』には、歴史家である著者が、どのように中世ヨーロッパに関心を持ち、その歴史を学ぶことになったのかが書かれています。筆者のドイツ留学時のエピソードや、伝説や音楽を通して見るヨーロッパ文化についても書かれています。この本を読みながら、文化を学ぶ意味や、それに伴う問題について考えます。日本とヨーロッパとの比較の視点も取り入れます。 この授業は、学生による口頭報告・ディスカッションを中心に進めます。報告のために、事前に個別面談を行いますので、心配はいりません。

担当教員名	授業のねらい
久保 忠行	比較文化の第一歩は異文化について知ることです。この授業では、私たちが日常的に触れるメディアを通して異文化がどのように伝えられているのかを「一歩引いて」みることを試みます。近年、日本文化や海外の暮らしを紹介するテレビ番組が増加していますが、そうした文化の比較で見えなくなるものは何でしょうか？ ここでは、文化人類学の枠組みをもとにして異文化の「理解の仕方」を学びます。 授業では、『電子メディアを飼い慣らす——異文化を橋渡すフィールド研究の視座』をテキストに、テレビ番組、雑誌、図書などのメディアがどのように異文化を描いてきたのかを概観します。そして、学術的に異文化を学ぶための視点、方法と作法をみにつけます。それをもとにして、受講者はメディアでとりあげられる「異文化」について考察し、最終レポートにまとめます。 授業の前半部では、大学で学ぶための基礎知識を身につけ、後半部で毎回報告者（グループ）を決めてテキストを輪読します。報告者（グループ）はレジュメにもとづいて発表し、それをうけて受講者全員で討論するというかたちをとります。3人で1グループをつくる予定ですので、無断欠席などで他の受講者に迷惑をかけないことが受講の前提になります。 たんに出席するだけではなく討論に参加し、自分の言葉で考えたことを主張して下さい。皆さんに学んでほしいことは、自文化の相対化です。自文化を相対化するとは、文化に優劣をつけず、他文化と自文化の比較をとおして、自文化を自由な視点から「えこひいき」なしで見つめなおすことです。テキストは絶版のため輪読する箇所を配布します。
佐藤 実	「彼女」「恋愛」「東京」「時間」……これらは150年前頃にできた新語です。つまり、それ以前にはこれらの言葉はありませんでした。 この授業ではわたしたちが普段つかっている言葉のなかで、明治時代にできた新語について、その言葉が誕生した経緯を検討したいと思います。 明治時代から近代と呼ばれる時代区分になるわけですが、それは今の私たちが当たり前すぎるほどなじんでいる制度が確立される時代でした。それまでになかった制度、文化、ものの考え方など、当時の人々は悪戦苦闘しながら取り入れていこうとしていきます。明治時代の新語から、その過程を追いかけます。
高田 馨里	比較文化入門は、大学における研究の最初の一步です。この比較文化入門の授業では、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポールなど環太平洋地域の英語圏の国々を取り上げます。これらの国々の歴史的背景、多様な人々が暮らす社会とその文化、共通点と相違点などを理解し、受講生自らが関心を持つトピックや分野を見出し、文献を調査し、報告準備をし、発表する技術を学びます。異なる国なのに、なぜ英語が公用語なのか？ また移民の人々の子孫が多く暮らす国であることなど共通点が多いのはなぜか？ こうした疑問を解いていくための技術を授業で学びましょう。 授業の最初に共通文献を紹介し、そのなかから受講生自らが、学びたいと思う分野、関心をもつことができるトピックを探します。次に、受講生全員で図書館ツアーに参加し、オンライン上での文献検索、書庫で実際に請求番号を手掛かりに目当ての文献を探し出す技術を学びます。さらに報告準備、発表、議論の技術ですが、これらを授業で身につけられるよう、サポートします。各授業で担当を決めて、しっかり準備し、発表を成功させましょう。そして授業の最後に、自分自身の調査の成果に基づく小レポートの作成を行います。これらの調査研究によって、自分が引き続き学びたいことを見出してください。 遅刻や無断欠席は、他の受講生に多大な迷惑をかけ、また授業ペースを乱すので厳禁です。しっかりと自己管理し、欠席に関しては教員に連絡をきちんと取るよう心がけてください。

担当教員名	授業のねらい
貫井 一美	比較文化というのは異国や異文化について学ぶことばかりではなく、同じ文化圏や国においても時代あるいは属する社会について学ぶことでもあります。この授業は、調べ方、発表の仕方、レポートの書き方などを含めて大学における基本的な学習方法を身につけながら、視覚芸術（主としてヨーロッパ絵画）を通して異なる文化を比較することがどのようなことであるのかを考える機会にしたいと思います。自分とは異なる文化を知ることが、自分の文化を知ることでもあります。客観的な視点にたって一つの事象を比較検討し自らの意見を持てるようになるための基礎能力を身につけることを目的にします。 授業は、第4回まではテーマを決めること、調べるということ、レポートを書くことなどの基本、また比較文化とはどのようなものかを教員の講義を例にして進めていきます。第5回以降は、西洋絵画の中からテーマを選んで担当者（またはグループ）に発表をしてもらい、それについて意見を交換するという形で進めていきます。視覚芸術である絵画は、好き嫌いといった観点から鑑賞するだけの対象ではなく、その制作された時代背景、宗教、社会、思想を物語る資料でもあります。一枚の絵画作品が私たちに語るメッセージをしっかりと読み解くことによって文化とは何か、それを比較するとはどういうことかを考えます。 自分でものを見ること、調べること、考えることは大学での「学び」の基本です。答えを見つけることにだけ邁進するのではなく、自らが「調べる」こと、「学ぶ」ことの楽しさに気づいてほしいと思います。
グレゴリー・ジョンソン	この科目では資料と映像を分析して、社会の近代化と変化の形を考察する目的です。テーマは「児童」です。学生個人が理論を把握し、過去の事実を分析する能力、プレゼンテーション技術と文章の表現力を高めることが重要な目標です。近代化のプロセスと、17-18世紀ヨーロッパの啓蒙運動以降の児童観を再考します。そこで、現代文学と映画の中の児童像を調べて産業化、戦争、テクノロジー、ポストモダン社会という枠を通して、社会は児童をどのように位置づけているかを分析します。